

古事記から学ぶ その12
神倭伊波礼毘古命から神沼河耳命へ

日向の高千穂から、難敵と戦い東征を続けた神倭伊波礼毘古命(かむやまといはれびこのみこと)が奈良の橿原に宮殿を構えて天下を治めた。これが初代天皇である神武天皇のことを語っているのだが、古事記原文には「天皇」としか書かれてはいない。

<1> 天皇の太后選び

神倭伊波礼毘古命(かむやまといはれびこのみこと)がまだ日向(ひむか)に居た頃の話という書き出しで、次の章が始まる。

阿多の地の●小椅君(をばしのきみ)の妹●阿比良比売(あひらひめ)を妻として、二人の御子が生まれた。第一子は●多芸志美美命(たぎしみみのみこと)、第二子は●岐須美美命(きすみみのみこと)である。この時点では阿比良比売(あひらひめ)は神倭伊波礼毘古命の後ではあったが、天下を治める時の太后(おおきさき)ではなかった。

神倭伊波礼毘古命は、自分の太后にする美女を探し求めている状況だったところへ、●大久米命(おおくめのみこと)から、こんな情報が入ってきた。

「この大和の國に神の御子と言われる乙女がおります。●三島湏咋(みしまのみぞくい)の娘で●勢夜陀多良比売(せやだらひめ)です。この乙女は姿・形が良かったので、三輪の●大物主神が彼女を好きになってしまい、乙女が川の上の厠に入った時に、我が身を「赤土を縫って染めた丹塗矢(にぬりや)」に変身して厠の下から、乙女の陰処(ほど)を突き上げました。大騒ぎになり、その突かれた矢を床に置いたところ、たちまち美男に変わり、乙女を妻としました。二人の間から生まれた御子の名は、●富登多多良伊須須岐比売命(ほとたたらいすすぎひめのみこと)、別名を比売多多良伊須氣余理比売(ひめたたらいすけよりひめ)と申します。名前に<ほど>という言葉が入っているのを嫌って名を改めたそうです。」

天皇(この章では、原文でも神倭伊波礼毘古命を「天皇」と書いている)が大久米命を伴って、高佐士野(たかさじの)の丘の上を歩いていると、七人の乙女たち(*註)が野遊びをしていた。その一行の中の先頭に姉の伊須氣余理比売がいた。大久米命は歌で天皇の気持ちを尋ねた。

「どの女がお気に入り?」天皇の意向を確かめた大久米命は、伊須氣余理比売にこれを伝えた。そして、伊須氣余理比売は天皇の後になることを承諾した>(*註:原文では「七媛女」と表記)

<2> 閑話休題(舞台となった場所)

*阿多はどこか

鹿児島県の薩摩半島の西南部、現在の南さつま市と日置市の一部を合わせた一帯が「阿多」だった。明治30年までは阿多郡や阿多村が存在したが、日置郡が起立すると同時に消滅した。

天孫降臨の時に、地上に降り立った天津日高日子番能邇邇芸命は、「この地は、遠くに海を隔てて韓国(からくに)を望み、笠沙の岬を正面に見て、朝日が射し夕日が輝く国である。こここそが吉相の土地である」と言って宮殿を造った「笠沙の岬」は、阿多の地の西側の海辺にある。

*高佐士野(たかさじの)はどこか

現在の地図で見ると、鳥取県西伯郡伯耆町、伯備線の伯耆溝口駅(ほうきみぞぐち)周辺だと言われ

ている。溝口は、伯耆大山の西麓、日野川に沿った出雲街道沿いの町。

阿多と高佐士野はずいぶん離れているので、二つの出来事の時系列の関係が理解しがたいが・・・。

<3> 伊須気余理比売の登場

「伊須気余理比売の家は狭井河(さいがわ)の畔にあった」と書かれている。現在の地図で言えば奈良県桜井市大字三輪、JR 桜井線の三輪駅の東側、三輪山の麓にある狭井神社がゆかりの場所。狭井河は狭井神社と大神(おおみわ)神社の間を流れていたらしい。三輪山の山麓から流れる小さな流れがいくつも集まって平野で大和川に入るので、水が豊かな所だったに違いない。

川の畔には山百合(佐葦:さい)が咲き乱れていたことから、この地名が生まれたと言われている。

天皇は、伊須気余理比売の家を訪ねて行き、一夜を共にした。

そして、二人の間に生まれた御子は●日子八井命(ひこやいのみこと)、次に生まれたのが●神八井耳命(かむやいみみのみこと)、その次に生まれたのが●神沼河耳命(かむぬなかわみみのみこと)。

<4> 初代天皇の終わり

天皇(神武)が亡くなって、残された大后伊須気余理比売は、多芸志美美命(たぎしみみのみこと)の妻となった。前述の通り、多芸志美美命は「夫の前妻の子」である。

多芸志美美命は、神武の三人の御子を殺して次の天皇の座を得ようと謀をしていた。そのことを察知した伊須気余理比売は、三人の御子たちに、密かに歌で「迫りくる危機」を知らせた。

三人の御子たちはこれを聞いて、歌の意味から窮状を理解して、多芸志美美命を殺すことにした。

末弟の神沼河耳命(かむぬなかわみみのみこと)の進言で、兄の日子八井命(ひこやいのみこと)が実行役になったのだが、いざその段になったら震えてしまって殺すことはできなかった。

すると末弟の神沼河耳命が立ち上がり、臆することなく多芸志美美命を殺してしまった。この武勇を称えて「建沼河耳命(たてぬなかわみみのみこと)」の別名が生まれた。

次男の神八井耳命(かむやいみみのみこと)は、弟の建沼河耳命にこう言った。

「お前は大事なことを見事にやり遂げた。私が年上だからと言って万民の上に立つことは得策ではない。お前が天下を治める役に着きなさい。私はお前を助ける役割を果たすつもりだ」

日子八井命(第一子)は、茨田(まむた)の連・手島の連の祖先に、

神八井耳命(第二子)は、意富(おお)の臣・小子部(ちいさこべ)の連、坂合部(さかいべ)の連・火の君・大分の君・阿蘇の君・筑紫の三家(みやけ)の連・雀部(さざきべ)の臣・雀部の造(みやつこ)・小長谷(おはつせ)の造・都祁(つけ)の直(あたえ)・伊余国造・科野国造・道奥(みちのく)の石城(いわき)国造・常道(ひたち)の仲(なか)国造・長狭国造・伊勢の船木の直・尾張の丹羽の臣・島田の臣などの祖先になった

そして、第三子の神沼河耳命が天皇として國を治めることになった。(綏靖天皇:すいぜい)

神倭伊波礼毘古命(かむやまといはれびこのみこと)すなわち神武天皇は、137歳、陵は畝火山の北方の白檮(かし)の木が生い茂った山裾にある。

現在の地図で確認すると、原文通りに畝傍山の北麓に神武天皇陵がある。

以上

*参照文献:古事記原文 https://www.seisaku.bz/kojiki_index.html

*神武天皇を中心とした系図(次葉参照):これまでの経緯を含めて系図にまとめて見た

神武天皇を中心とした系図

